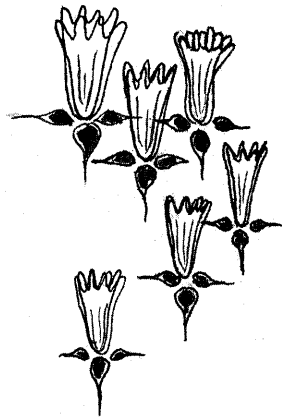


若いお母さんたちへ

## 長女と私の中学時代

はるにれの会

塚田 幸子



緑の美しい季節を迎えて、戸外へと心が向いて行きます。憲法記念日と子どもの日にはさまれた五月四日が今年から新たに国民の休日になりました。この三連休をどのように過ごすか、それぞれのご家庭で様々に思いをめぐらせていらっしやることでしょう。

デンバーから帰って、もう四年半もの月日が流れたことになる我が家では、この連休が長いこと待ち望んでいたものに思われます。週休二日体制で、週末毎に家族で

ピクニックやキャンプを楽しむことのできたデンバーでの生活は、日本では当分実現不可能なこととあきらめ始めた頃、貿易摩擦による円高、日本人の働き過ぎ批判による労働時間短縮のかけ声がわき起こってきたからです。私がいくらひとりで不平を言っても、どうにもならなかったことが、今、時代の流れとして、海外からの要求として、大合唱となって、実現の方向へ動き出したのです。その意味で、この五月の三連休は、これまでひたすら働き続けてきた日本人の企業戦士たちとその家族に、家族や友人と共に過ごす時間のことを考え直すきっかけとなってくれることを私は期待しています。とは言え、我が家では、小五の次女はともかく、高校生になる長女が、家族と共に過ごすことを最優先に喜んでくれるかどうか、私はちょっぴり心配しています。と言うのも、長女が中学生になってからは、何をするにつけ、友人と共にする方が楽しくなって、我が家の休日の行動は、それまでのように両親の考えや都合だけで決まると言うことがなくなってきたからです。

中学生の親となってとまどった時のことは以前に投稿した文に書いたと思いますが、今度はその娘が高校生になるのです。ところが、今は、あの時ほどの不安や期待は、少なくとも私の側にはなく、冷静に受けとめています。恐らく、私自身が、俗に言う子離れを始めたからなのでしょう。当時は、私自身の中学時代の気負いのイメージが、長い眠りからさめて長女の上に重ねられ、長女の側からは、目の前にいる本当の自分の姿を見つめようとしないうちに、反抗したのだと思います。長女の中学時代の三年間、私は私自身の中学時代を単に思い出だけでなく、現在の私にとってその意味を、長女に照らして、生き直したような気がします。それは、それまで疑ってみることさえしなかった価値観が、次々と相対的なものに変えられていく過程でした。例えば私が、単に思いこみや美化によるのか、自分が中学生だった頃は時間勉強したとか、親や先生の手伝いをよるこんでしたものなどと、ついもらすと、「そんなにまでして、良い点を取りたいとか良い子になりたいなんて思わない」

とびしゃりと言ひ返されて、黙ってしまうのは私の方でした。長女に反論される度に、私はいろいろ考えました。良くないと知りつつ、「娘はあんな風に言うけれど中学生になれば（中学は公立なので）高校受験があるのだし、試験の度に厳然と点数で評価され、内申書なるものもあるのだ」と我が事以上に心配になったのです。もう少し努力してもよいものをと気をもんでしまうのです。何度も何度も似たような会話をくり返し、そうこうする内に、多分、長女が二年生になった頃から、私は、頭ではわかっていた当然のことに気がついて、あるいは次第に慣らされ、あきらめて、これは、娘自身の人生であり、いくら母親でも、踏み入ることはできないのだと悟ったのでした。そう思えてからは、心配は心配でなくなり、自分の心配は自分でしているに違いない、私が心を痛めるような領分のことではないのだと納得するようになっていきました。そうすると、どうでしょう。長女は顔つきまで変わってきて、小学生時代のままではあり得ないまでも、その頃のような可愛い笑顔がもどってき

たのです。私は長女に対してそんなにも重圧をかけていたのでしょうか。今になって思えば、長女の側から見れば、私自身の顔つきや態度が、彼女に対して同様に變化したのだろうと、苦笑させられます。

長女が幼ない頃のことを夕食の時に、何かの拍子で思い出し、語り合ったことがありました。長女とにこやかに話し合える場面の増した昨今のことでした。まだ幼稚園に行くか行かないかの頃のことです。彼女はある時期家の中でばかり遊び、ばったりと外遊びをしなくなったことがありました。私の頭には、「子どもは風の子、外で元気にとびまわるのが、健康かつ良い子である」という図式があり、どうにかして彼女を外に出したいと強く思うようになっていたのです。私は、ある日ある時、強権を発動して、いやがる彼女をドアの外に押し出し、外で遊んでくるように言い、ドアの鍵をかけてしまったのです。「さあて、これで、いやが上にもあの子は外で遊んでくるに違いない」と私は考えました。三十分だったでしょうか、一時間だったのでしょうか、実際の時間は

さておき、私の側からは十分に思われる時間がたって、「きつと外で何かを見つけて遊んでいるに違いない」という自信と、「そろそろ何をしているか見に行つた方がよいのでは」という心配とで、そつとドアを開けてみると、何と、そのドアに寄りかかるようにして、泣き顔で（泣いてはいなかった。声は少しも聞こえず、ドアを叩く音もなかった）しゃがみこんだままの恨みのこもつた目つきの彼女の姿があつたのには、私の方がびっくり。何ということでしょう。あの小さい身体で、彼女は私より精神力で勝つていたのです。完全に私は敗北してしまつた。長女はきつとこの時も、目の前にいる我が子のことであることを表面だけでとらえ、固定観念によって暴力的に我が意に従わせようとする母親に抗し、その非を認めさせようとしたのでしょう。「三つ子の魂百まで」などと言うまでもなく、長女は一貫して今日まで彼女自身であることを主張し続けたのだということに私は新たに思い到つたのです。

話は連休の過ごし方にもどつて、私たち夫婦の価値観

である緑の山中での休日に、長女が乗ってくるかどうかは、以上のような理由もあり、未定というところです。

私たち夫婦にしても、これまでの十七年の生活という歴史の中で、共有してきた価値観があり、最近では長女のそれとの対照によって、むしろ互いにその共通性を確認することがふえたような気がしているのですが、ほんの数年前には、激しい対立と妥協のくり返しであつたことは皮肉にも長女が証人になってくれることでしょう。夫婦の間にも何度も危機はあつたのです。結婚という出会いもまた、異なつた価値観（文化）の出会いであり、二人の間には、大なり小なりの衝突、摩擦が絶えず起こつたのでした。けれど、このぶつかり合いこそが、お互いを深く理解していくためになくてはならないものだったのでした。そして二人の間に生まれた子どもは、両親のどちらにも似ていながら、全く異なる存在でもあるという当り前のことも、時として見失つてしまうことがあるものなのです。母親である私は、そう納得してから、長女との関係が再び安定的になつてやれやれと思つていまし

た。

一方、帰国して以来、典型的な、日本人働き中毒ビジネスマンに変身させられた夫の方は、朝の出勤前、朝食時にあわただしく家族と顔を合わせる以外、二人の娘たちと触れ合う時間が、平日はほとんどないようになり、休日も疲れ切った心と身体を休めるだけで精一杯、家族でくつろいだり、積極的に楽しんでたりする時間的、精神的余裕が加速度的に減っていききました。それは今もとどまることなく進行しており、本当にいつ倒れてもおかしくないというまで事態は悪化しています。こんな状態は、私の夫だけでなく、日本の多くのサラリーマンの実態であるということを知らない人はほとんどいないはずで、毎日のようにマスコミで報じられているからです。そして、そういう働き中毒にかけられたサラリーマン家庭では、どこも似たような状況になって、父と子らの触れ合いが極度に少くなり、コミュニケーション不足から、父親と子どもたちがお互いを理解する機会を失っているという例も数多くあるものと思います。こんなこ

とを言うのも、ようやく私自身が、長女に対する見方、接し方を改善（と今は思っている）したと安堵した矢先に、今度は夫と長女の間には衝突が起こったからです。先の論法でいけば、これも、双理解のための第一歩かもしれないませんが、私にとっては、仲介役としての新たな問題です。私自身が、それまでは、夫の考え方に近かったのですから、その気持ちもよくわかり、今は長女の気持ちもわかるようになっていたので、見ていて内心ハラハラし、静観すべきかも含めて、どこでどんな形で間に入るべきか、とまどいを感じていました。

事は、いつも、ささいな事から起こります。子どもたちが今しも就寝という時刻に、仕事上のつき合いでかなり酔って帰宅した夫が、食卓の上の長女の成績表を見て、（運悪く居合わせた）長女をいきなりどなりつけたのです。長女は、恐らく覚悟はしていたものの、酔った勢いの父親の態度にも反発したのでしょう。泣き声で捨てゼリフのように言い返し、逃げるように床に就いてしまいました。その晩は夫も長女の態度に腹を立てなが

ら、やはり酔いと疲労で寝ついてしまい、翌朝に事件は持ちこしました。長女に対して表現上まずいとすることもあったという意味で、夫が成績表のことに触れた途端、長女は蹴るようになって席を立ち、朝食の席が台なしになりました。朝食はいつもより長女の好みに沿っていたので、私がそう言い、もっと食べて行くよう促すと、食べに来ただけという態度で、話を続けようとする父親にはかえって背を向け、それでも話を続けようとする、今度は箸と茶わんを持って席を立ってしまったのです。これには父親も、母親である私もびっくり。私も思い余って、とにかく席にきちんとつくようと言いました。結局、家を出る時間となった長女はそのまま出て行ってしまったのです。収まらないのは夫です。出勤するまでの貴重な残り時間すべてをかけて、私に、どんなしつけをしているのかと怒りをぶつけ、成績どころか、立ち居振る舞い、人としての礼儀について、「生きていく資格がない」とまで言い、どんなに重要であれ、その晩は仕事はさておき早目に帰宅し、長女と話をつけるのだと言い

残り、家を出て行きました。

その日学校から帰った長女は、生理痛で苦しんだものの、それも治まった頃、私は、朝食時の事件についてどう思っているのかを問い、反省すべき点を指摘し、父親の真意を伝え、両親の考えを伝えた後、彼女自身に、帰宅してくる父親に対してどんな対応をするのか決めておくようにと言っておき、夕刻までに、対立やお互いの誤解の根は一応取り除かれたのです。が、それにしても、父親が、日常的に早く帰宅し、夕べの団らんが充実したものに比べ、こんな誤解や対立の激しさはやわらいだものになっていたのではないかと私は思うのです。その晩は、勢いこんで帰宅し（大事な会合をひとつ欠席してまで）、長女と話し合うつもりであった夫ですが、それでも、体調が悪くて早目に就寝してしまっただ娘たちにとっては、すでにその日は終わってしまっていました。私が一応ひと通りの話をしておいたことを聞いて、夫もその晩は早目に床に就きました。対立の気分は消えかけていましたが、なお私はハラハラして翌朝を迎えました。

珍しく早目に寝たせいも、全員がいつもより一時間近くも早く起き出して、夫と長女はと見ると、互いに相手も気遣いながら、少しごちなくも、にこやかに会話を交わしているのです、私もようやく胸をなでおろし、ひとまずは、一件落着となりました。

それにしても、父親の存在が疎ましく思われる年代というものがあるのでしょうか。この頃、長女は父親の帰宅を気にかけて、ある夜仕事で泊まりこみになり、帰らなかった父のことを、「お父さん、夕べ帰って来なかったの?」「そうよ」「別にいいけど。いない方が気楽で。」と言っており、私には何となく気にかかっていた矢先の事件でした。

更に何日かたって、私は、「別にいいけど。いない方が気楽で。」と言っていた娘の言葉はむしろ全く逆に、父親と正面きって向かい合う必要があるという信号だったのではないかと気づき、ハッとしました。父と子は互いに愛し合いながらも、旧世代と新世代の価値観の対決を迫られる時を経ていくものかもしれません。それは男

の子にだけあるのではなく、父と娘の間にもあるのだと思います。私自身も中学時代以来、父親としばしば意見を対立させ、その過程で、自分自身の生き方を明らかにしていったのだと長女を見ていて思うのです。それは巣立ちのための羽ばたき練習のようなものでしょう。

結局、「幼児の教育」という本誌のタイトルにふさわしいかどうか迷いながら、高校生にもなる長女の話ばかりなのですが、小学二年の終わり近くから、五年生の終わり近くまでをアメリカで過ごした間、長女は、映画では「ネバーエンディングストーリー」となったミヒヤエル・エンデの「はてしない物語」を日本語で三度も読み返し、エンデの作品はあの「モモ」を含めて全て読んでいます。私も、「はてしない物語」と「モモ」を読んだ大変おもしろいと思ったのですが、それでなおさら長女とは共通の体験を持ち、考え方も相当一致しているはずだという思いが、私の側にあったように思うのです。私が考慮しなかった長女と私との差異はあまりにも大きいものがあります。年齢の違い、育ってきた時代、

環境の違い、その他諸々の違いを私はほとんど無視していたも同然でした。同じ「おもしろい」という感想でも、同じ作者の同じ作品からでも、読み手によって、得るものは違っていたはずなのでした。

まわり中が、外国人（自分にとっての）であったデンバーの生活では、予期せぬ親切や思いやりがやたらとうれしく感じられたものでした。そして日本人同士の方が、冷たいとか意地悪く思えたものでした。どちらも実際以上にそう感じられたということです。もう一度行ったら、もっと気楽にやれることでしょう。それと同じように、長女との関係が、これまでよりリラックスしたものになるかどうか、それは連休の予定と同じく未定です。

